

氏名	かとう あやこ 加藤 亜矢子
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第961号
学位授与の日付	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学位論文題目	都市の観察に基づく建築設計方法に関する研究—都市との「同化」と「異化」の概念をとおして
審査委員	(主査)教授 松隈 洋 教授 長坂 大 教授 阪田弘一

論文内容の要旨

本論文は、建築の設計者が設計に先行して行う敷地及び周辺の現地調査である「都市の観察」によって、既存の都市のコンテキストをどのように理解し、そこから何を読み取って、どのような分析と検証を行い、建築設計の実践にどのように活かすのか、という観点からまとめられた建築設計の方法に関する研究である。

第1章の序章では、研究の背景、研究の目的、研究の対象、既往研究と本論の位置づけがなされている。研究の背景には、高度成長期に開発された郊外住宅地と商品化住宅の増加によって、場所性や地域性が希薄化している社会的な状況がある。そんな中、より詳細な都市の観察を行うことによってコンテキストをあぶり出し、建築設計に活かすことの重要性を認識する立場から、研究の目的として、建築設計における「都市の観察」の役割を明らかにすることが設定される。考察の対象となるのは、申請者自身の設計した建築作品4つの事例である。そして、分析と検証、建築設計の方法の鍵となるキーワードとして、「同化」と「異化」という概念が提示される。さらに、既往研究に言及し、本論文の独自性として、建築設計の実践過程として都市の観察を扱っている点を挙げている。

第2章では、3つの事例の建設地で実際に行った都市の観察で得た情報と分析の結果が記述されている。また、抽出した都市の要素をその性質によって6つに分類し、そこからその都市が持つ特性をキーワードとして言語化する試みが提示される。この言語化にあたっては、既往研究に見られるような、都市を「図式化」して単純化する方法を回避し、都市の持つ複雑性を温存できるように、さまざまな意味を孕んだ表現にとどめる記述が意図的になされている。

第3章では、〈N邸〉を事例1として取り上げ、その特徴である「ファサードの設計方法」において、どのように都市の観察に基づく知見が具体的に用いられて活かされたのかが分析されている。ここでは、周辺の街並みに同化しようとする受動的操作のデザインと、似せながらも異化しようとする能動的操作のデザインとして、屋根の形状と材料と色、2階の窓の材料と形状、外壁の材料と色、外構の境界の取り扱いについて、具体的な方法が分析されている。

第4章では、〈赤い別邸〉を事例2として取り上げ、その「空間構成の方法」に着目し、特徴として挙げた動線、視線、シークエンス、環境、内部空間のプロポーシオン5つの点が、どのよう

な設計プロセスから導き出されたのかが分析されていく。そして、それらの特徴が、都市の観察から得られた街の空間体験に対する都市に開く「同化」と都市から閉じる「異化」という方法によって生み出されたことを検証している。

第5章では、〈ペインターハウス〉を事例3として取り上げ、アトリエ併設住宅の建売住宅並みの低コストと短工期という設計条件から、実際に試みられた「材料とディテール」に着目した設計方法についての分析が行われていく。その中で、建売住宅の標準仕様を踏襲し、「量産品を活用」する「同化」と、建物の部位として陸屋根の納まりや、木製階段などで工夫された材料の使い方やディテールの納め方に、「大工の技術」に頼った「異化」の設計がなされていることを検証している。

第6章の総括では、以上3つの事例に見られる「同化」と「異化」の操作の成果に対するまとめがなされた上で、第三者と既往研究による検証が行われ、それぞれの事例に寄せられた批評文から、申請者が試みた設計方法の客観性が裏付けられたことが確認されている。そして、〈天井の楕円〉という事例4を取り上げて、その築20年の戸建住宅のリノベーションで試みた「楕円形状の穴の空いた天井」というオブジェクトの挿入という設計方法が検証される。こうして、第6章の結びでは、「都市の観察」による「同化」と「異化」という概念を用いた設計方法によって、建築を「モノ」として存在させることの重要性を指摘してまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「都市の観察」という作業を通して都市のコンテクストを読み取り、それを建築のデザインに定着するという独自の設計方法に関する研究である。そして、都市のコンテクストの読み取りから、デザインへと定着させていくプロセスの中で、「同化」と「異化」という概念を用いることによって、既存の街並みと調和しながらも、建築としての存在感の強さを持った建築、都市のコンテクストに馴染みつつ、自立性を有する建築を作り上げるために有効な設計方法について、詳細な分析と考察を行っている。

長い建築の歴史の中で、これまでも、都市の観察を通したさまざまな読み取りやコンテクストの解説という研究はたくさんなされてきた。申請者が既往研究として挙げているケビン・リンチ『都市のイメージ』（1960年）、ゴードン・カレン『都市の景観』（1961年）、クリストファー・アレグザンダー『パターン・ランゲージ』（1977年）などは、著名な研究である。また、日本における近年の成果としても、1970年代前半に複数の大学の研究室が実施した「デザイン・サーベイ」と呼ばれる一連の街並みの実測調査や、塚本由晴らによるヴァナキュラーな現代都市の観察記録『メイド・イン・トーキョー』（2001年）など、数多くの蓄積もある。そのような既往研究の成果を踏まえた上で、申請者は、建築家という実際の建物の設計と現場監理に携わってきた経験から、都市の観察を具体的な設計方法にどのように活用するのか、というより実践的な設計者の視点からの詳細な考察と緻密な分析を行っている。この点にこそ、本論文の独自の価値と意味がある。

研究対象の事例として取り上げられているのは、申請者自身が設計した3つの新築の住宅建築と1つのリノベーションである。本論の中で、事例1の〈N邸〉は「ファサード」、事例2の〈赤い別邸〉は「空間構成」、事例3の〈ペインターハウス〉は「材料とディテール」、というそれぞれ

の建物の特徴となるデザインが、どのような「都市の観察」に基づく「同化」と「異化」による設計方法によってつくられたのかが論理的に説得力を持って考察されていく。さらに、既存建物のリノベーションによる設計事例として取り上げられた〈天井の楕円〉という住宅建築では、3つの新築事例で考察された設計方法が、リノベーションの中でも同じように活用されていることが論じられている。これらの事例の分析と考察によって、明快な形で展開されているのは、なかなか見えにくい建築設計の実務段階における想像力と創造力の発揮されていくプロセスである。ここに考察され、分析された設計方法のプロセスによって、初めて、設計という行為が持つ見えないものを見えるかたちに変換する創造の内実が、誰にでも理解できるものとして説明されている。その意味で、本論文は、図らずも、建築計画学における合理的で理論的な建築計画の進め方がとかく陥りがちな、積み上げ型の定型化された建築の計画・設計方法の孕む限界点を指摘しており、建築の設計が果たすことのできる創造性への回路を、原理的なものとして切り開いているという点でも、画期的な意義を有している。さらに、申請者が提示したこの設計方法の有効性については、第3者による批評文を用いた検証も行われており、高い客観性を持つものであることも分かる。

こうして、本論文では、新しい価値を創造する実践的な行為としての建築設計の内実とそのプロセスを詳細に記述することによって、申請者個人の建築家としての仕事の範囲をはるかに超えるものとしての、極めて普遍性の高い建築設計の方法論を提示することができている。ここで論じられた設計方法は、建築界に重要な貢献を果たすものと評価できる。

尚、本論文で考察の対象とされている申請者の設計による4件の建築作品については、下記の建築賞を受賞し、主要な建築雑誌に掲載され、日本建築学会の査読付きの『作品選集 2020』への掲載が決定されている。

(1) N邸／設計：加藤亜矢子、村山徹

『新建築住宅特集』2013年7月号 第327号 22頁～33頁

(2) 赤い別邸／設計：加藤亜矢子、村山徹

『新建築住宅特集』2015年6月号 第350号 70頁～77頁

(3) ペインターハウス／設計：加藤亜矢子、村山徹

『新建築住宅特集』2015年6月号 第350号 62頁～69頁

・東京建築士会住宅建築賞 2016 住宅建築賞（一般社団法人東京建築士会）

・第59回神奈川建築コンクール 住宅部門 優秀賞（神奈川県 他）

(4) 天井の楕円／設計：村山徹、加藤亜矢子

『新建築住宅特集』2019年2月号 第394号 46頁～53頁

『作品選集 2020』（一般社団法人日本建築学会）掲載決定、2020年3月刊行予定

・住まいの環境デザイン・アワード 2020 優秀賞（リビングデザインセンターOZONE）